

研究活動報告 (26)

甲賀市甲南町森尻における山の口祭 調査報告

櫻井 想^{*1}・須藤 護^{*2}

調査概要

滋賀県甲賀市甲南町森尻における山の口祭 踏査

調査日－2010年1月1（金）

調査者－櫻井想、須藤護

山の神祭について

1月初旬、もしくは月遅れの2月初旬に滋賀県の湖南地方から湖東地方に至る広い範囲の各地で「山の神祭」、あるいは「山の口祭」と呼ばれる儀礼が今日なおおこなわれている。この地域は東南に鈴鹿山地をひかえた山地帯と、琵琶湖に近い水田地帯とに分かれているが、山の神祭は山に近い地帯で多くみられる。これらの地域は山の資源に頼ることと生活をたててきたムラが多かった。そこで毎年年初めにあたり、宮守の組の者たちが祭の段取りをして神饌をささげ、山の神にたいして山に入る許しを乞い、感謝の意を表するのである。山の神祭は人と山、あるいは人と人とのつながりの歴史・文化を物語る神事といえよう。

甲賀市甲南町森尻

甲賀市甲南町森尻は、この辺りの地域で最も早い1月1日に山の神祭をおこなう。森尻では山の神祭といわず、この祭を「山の口祭」という。森尻は現在48軒の集落で、古くは前挽鋸の職人や、木挽が多く暮らしており山と深い関わりがあった地域である。

^{*1} 龍谷大学大学院国際文化学研究所

^{*2} 龍谷大学国際文化学部教授・里山学研究センター研究スタッフ

山の口祭を支える組織 ―宮守―

宮守とよばれる役職を務める者が山の口祭を取り仕切る。宮守とは文字通り鎮守の宮を守る人であり、毎月1日、7日、14日、24日の早朝に身を清めたのち、正装をして森尻の鎮守である八坂神社に参拝し、境内を清掃して新しい榊を供え、供物をささげることが重要な日課となる。また、宮の管理だけではなく、例大祭がおこなわれる際には神主の役目もはたすなど、神主の制度ができる以前の古い神祭りの姿を残している。

森尻では年に4回の大祭がおこなわれる。山の口祭（1月）、サナブリ祭（5月）、祇園祭（7月）、小森祭（10月）がそれにあたり、山の口祭は年の初めにおこなわれる重要な大祭に位置付けられている。そして任期である1年を終える最後の仕事がこの山の口祭でもある。この際に宮守の引き継ぎがおこなわれる。森尻では年齢順に宮守の順番が決まっており、50歳代の人にまわってくることが多いという。その年に身内に不幸などがおきなければ、ほとんどの人が通過しなければならない役割であった。

山の口祭を支える組織 ―カブ―

前述の宮守の仕事を助けるために「カブ」とよばれる9人の仲間が組織されている。基本的には森尻地区内に住んでおり、宮守と血縁関係にある家と近隣の家の世帯主で構成される。これらの人々は、1日の早朝から宮守の家に集まり神に供えるための作りものを作るなど祭の準備をおこなう。また直会の際には接待役にまわる。

山の口祭に用いる作りもの

- ①竹の箸（長さ25cm、70人前、参列者用で直会の際に使用）
- ②竹で編んだ供物をのせる台（30cm角、紅白の餅用6枚、エビ用1枚、合計7枚）
- ③カツオの尾でこした矢（2本）
- ④矢の的になる旗（12枚）
- ⑤2つの石ころを入れる藁ツト、水引でくくったもの（2個）
- ⑥ゆきひらで炊いた粳米のごはん（山の神の前で皆が分け合って食べる）
- ⑦白酒を入れる竹の筒1.5mの柄をつける（1本）
- ⑧御幣をはさむ竹の棒（女竹を使用し、長さ3mほど、2本で1組）
- ⑨御幣をはさむ竹の棒（女竹を使用し、長さ1.5mほど、2本で1組）

⑩注連縄（山の神用4.2m、八坂神社の鳥居用3.2m、合計2本）

⑪餅（餡を入れた紅白の餅で6重ね、白餅1升8合を6枚、赤餅も同様）

⑫紅の餅の前におこわを入れた重箱を置く

⑬稲穂1輪など

このほかに干柿（60個）、伊勢エビ（2匹）、直会の際の酒と肴（ご飯1口、ゴマメ、ゴボウ、煮豆、刺身、ミカンなど）が準備される。干柿は餅と同様、神の下がりものとして参加者全員に配られる。2匹の伊勢エビのうち1匹は儀礼終了後に宮守宅で慰労会がおこなわれるが、そのときの御馳走となる。もう1匹は引き継ぎ後の新しい宮守の家で「カブ」の人々に振舞われるという。

山の神に供える供物の中で最も重要なものは注連縄とカツオの尾でこしらえた矢、そして紅白の餅であろう。注連縄は粳米の藁でなうのであるが、森尻の注連縄は馬を象徴しているという。したがって馬のたてがみを模したように、藁の束を直立するようになるのが特徴であり、2本なった注連縄のうち1本は鎮守である八坂神社の鳥居に取り付け、もう一本の長いものが山の口祭の神事用となる。馬は山の神に捧げる供物であり、カツオの尾でこしらえた矢はこの馬を射るための矢である。また赤い餅は赤飯を白で搗いたものであり、紅白の餅は馬の肉を象徴的にあらわしているという。

カブの仲間は、当日の午前中に多くの供物をこしらえるのであるが、山の神に供える物がなぜ馬なのか、また矢の材料はなぜカツオの尾なのか、という理由は分かっていない。ただ興味深いことは、⑤で示した丸い石を2つ包む藁ツトは、オス馬を象徴するものであるという。この地方の山の神は女性であることからであろう。これを2組作るので、2頭の馬を奉納することになる。これにたいして、神様を象徴する御幣は長さ3mと1.5mの竹にはさみ、それぞれ2組こしらえるがいずれも女竹を用いている。この地方の山の神祭は、男神と女神、オスとメスなど男と女が主役になる場合が多い。

山の口祭の工程

一通りの準備が終わると宮守の家の神棚の前で祝詞をあげ、家に祀られている神に出発のあいさつをする。神主を務めるのはやはり宮守である。午後2時になると、女竹にとりつけた御幣を手にした宮守を先頭に、カブの仲間が行列を組んで八坂神社にむかう。行列のなかの一人が「エトエトヤー、エトエトヤー」と大きな声をあげると、それにこ

たえるように皆が馬の鳴き声を発しながら粛々と進んでいく。社参行列のさいに、この種の掛け声をかける祭が近江地方には多いが、これも確かな理由は分かっていない。八坂神社には森尻地区の氏子連中が正装をして一行の到着を待っている。一行は運んできた供物をいったん拝殿に置き、拝殿にて宮守の引き継ぎがおこなわれる。この年の山の口の祭までの神主は前年度の宮守が務め、祭の終了後に新しい宮守が誕生するのである。

しばらくの間、1年間勤めた宮守の労をねぎらい、新たに誕生した宮守を祝福するための宴がつづき、夕方近くになると八坂神社のうしろの山に祀られている山の神へと向かう。山の神の前にこの日の午前中に作った注連縄をはり、その下に6組の紅白の餅と1組の伊勢エビを供える。そして宮守が祝詞をあげ、全員が礼拝して山に入る許しを山の神に乞うのである。併せてこの年の豊年と家族の安泰を願う。祝詞が終わると、カブ仲間1人が注連縄の一端を一瞬のうちに切り落とす。この儀礼が象徴するように、馬をかたどった注連縄が切られたのちにはじめて、森尻の人々は山に入り仕事ができるようになるのである。注連縄を切り落とすことが「山の口祭」の主要な儀礼であり、「初山入り」を象徴していることが理解できる。礼拝が終わると神に供えた餅を下げ、皆に分配できるように切り分ける。餅をもらった者は竹や木の棒にさして篝火にあてて焼き、その場で食べる。この餅は、女性は食べることができないという。

山の神祭の性格

滋賀県の湖南、湖東地方の山の神祭は、行事の内容が少しずつ異なっている。しかし基本的に共通している点がいくつかある。その一つは山の神は女性であること、そして必ず海の魚を供えることである。古くはシイラという魚を供えた地域もあったようだが、今日ではイワシが多い。森尻のように伊勢エビやカツオの尾の例もある。もう一点は、男女の神が必ず登場することである。股木を上手に加工して男の神と女の神を作りそれを山の神に供える、また男神と女神を交接させ、子孫繁栄と五穀豊穡を祈願することが主要な儀礼である地区もある。森尻の場合は男神と女神は作らないが、オス馬の象徴と女竹にさした御幣がそれにあたるのであろう。いずれの問題も解明できていないことが多いが、強調すべきことは、基本的にどの地域であっても、この儀礼をすませることなしに山に入ることができないという意識を、皆が共有している点である。森尻がもっとも早い時期にこの儀礼をおこなってきたのは、山仕事にかかわる人々が多かったからか

もしれない。

現代における山の口祭の意義

現在は山仕事やその関連産業が活気づいていた時代とは異なり、間近に山をひかえているムラにおいてさえも、山から資源を得ることが少なくなった。それは山の神祭や山の口祭をする必要がうすれ、また神を祀る必要がなくなったことを意味している。この種の儀礼が消滅してしまったムラも多いであろうし、仮に伝承されていても祭自体が形骸化し、本来の意味がわからなくなっている例も少なくない。このような状況の中で滋賀県下の山の神祭は、以前とは異なった意味を持ちはじめている。つまり、山野への思いや価値観を共有する人々が神の前に集うことにより、祭の場が共通の価値観を再認識する場になっているのである。神の前で久しぶりに顔を合わせたことを喜びあい、健康を確かめ合い、またかつてさかんであった山仕事の話に花を咲かせる。その話を若い人々が珍しそうに聞いている。祭の準備から儀礼が終了するまで、一連の儀礼を執行していく中で、山に対する人々の思いが年配の者から若い者へ確実に伝わっているようであった。

今日の祭が果たす役割として重要性を増してきたことの一つとして、人と人を結びつけることがあげられよう。それは古くからの祭の側面を継承しているとともに、新たな祭の側面が主要な機能として人々の間に広がっている。祭の場に集まってくるのは年配の人が多いが、都市部に通勤している比較的若い人々の姿もみられる。またこの祭に参加するために、居住先である大阪、京都、大津などから帰ってくる人もいるが、いずれの年代層も実際に山仕事に携わっている例はきわめて少なく、現在の生業と山仕事は直接な関わりがうすい。そのような人々が朝早くから祭の準備をおこなう。しかしながら、作りものを作っている人々の表情はとても明るく、和気あいあいと儀礼の準備を進めていた。非常に安定した人間関係がそこには見られた。祭の場が、共同体の中で自らの役割を果たす場となり、その一員であることを再確認する場になっているのである。儀礼が終わると神の前でそろって食事をする。その空間は和やかな雰囲気があり、祭が滞りなく終了すると、今年も一つ大きな仕事をやり遂げたという満足感に満ちている。今日、各地で祭の復活や村落共同体における人と人とのつながりに注目が集まるのは、そのような理由があるからであろう。